

## 心身障害児の親の養育態度(その2)

— その経過と指導体制のあり方 —

東京都児童相談センター

上出弘之 開原久代

### <目 的>

児童精神科の臨床の場では、障害児の養育相談が占める比率がかなり高いが、きめ細かな養育指導を行うためには、障害児の症状を明らかにするだけでなく、親の養育態度を十分に理解していなければならない。すなわち、子どもの障害の重さや適応の状況を知るだけでなく、親の性格、不安、影響を受けている情報や就学への考え方などを考慮することが養育指導を行う際に大切なことである。

前年度の研究では、外見上明らかな身体所見の少ない精神遅滞児について、親の養育態度と子どもの状態像との関係を調べたが、今年度は、同じ対象児の親たちが、2年、5年という経過の中で、子どもの発達と社会条件の中でどのように変わってゆくかを調べ、必要とされる指導体制を考えた。

### <対象および方法>

対象は、50年5月から56年3月までに、東京都児童相談センター治療指導課の Day Treatment Program(週2日の6ヶ月指導プログラムで終了後は地域の機関に紹介しフォローする。)に参加した2歳から6歳の就学前幼児で、57年2月までの Follow up Program(以下FPと記す)の参加対象となった282名のケースの親(主に母親)からなる。

子どもの状態像は、言葉のおくれを主訴とする精神遅滞児で何らかの行動異常を伴うが身体的所見の合併例は比較的少ない。

親の養育態度の評価は、アンケートも使用

したが、親のグループ面接の際の発言態度と子どもへのかかわり方から主にその特徴をとらえた。親の養育態度の変化や成長をとらえる話題や観察ポイントとして、①親がわが子の発達程度をどうとらえているか。②将来への期待。③就学健診への対応の仕方。④地域機関への満足度。⑤マスコミや知人より得た情報への対処の仕方。⑥母親の全体的印象などを重視した。アンケートについては、年度ごとに内容項目を検討し、改定を試みまだ完成途上にあるため、対象者全員に共通して行うに至っていないが、本研究で参考にした項目は、①育児書を利用したか(利用しない。(1冊, 2~5冊, 6冊以上)利用した) ②心配事がおこった時の相談相手(夫, 実家の母, 姑, 医師などの専門家, 知人, 親せき) ③障害の原因についてどう思うか。(わからない。親の育て方。妊娠, 周産期, 出産後の異常。遺伝。その他。) ④将来どう変化するとと思うか。(わからない。部分的変化改善はある。(小学校)(中学校)(大人)までになおる。なおらない。悪化する。その他。) etc である。以上のような項目を含むアンケートを、通所指導開始のとき, 終了の時, 6ヶ月FP, 2年FP, 5年FPの際に同じように実施した。

FPは、52年3月から、6ヶ月ごとの Follow up としてはじめてしたが、ケース数の増加を考慮して、55年4月から、6ヶ月, 2年, 5年の Follow up に年数を定着させた。FPの運営は、6ヶ月目の時は、指導グループごとに行い、2年以上のFPでは、同じ時期の指導グループを一緒にして行った。あらかじめアン

ケート類を送付し、FP実施日にその提出およびフィードバック指導を行っている。欠席者からもアンケートの回収は行っている。FPは、欠席者や、連絡のないものをみこんで、常時、8人から15人の親のグループ指導ができるように準備計画をして月1回施行している。

表1 Follow up Program への参加状況

フォロー月	対象児数	参加数(%)
6ヶ月目	182	144 (79)
1年目	79	60 (76)
1年半目	25	14 (56)
2年目	230	166 (72)
2年半目	37	9 (24)
3年目	49	18 (37)
5年目	51	13 (25)
就学年齢時	50	25 (50)

るが、今までの参加状況は表1のようになる。また、FPの親グループと併行に、子どものグループ観察も行い発達変化のチェックを試みている。

なお、今回の対象例の中には、症例数は少ないが、外見的に明らかな身体特徴や診断も明瞭な精神遅滞児（ダウン症2，脳性麻痺1，難聴1，心奇形1）が含まれているので、その親たちの養育態度の特徴を観察し、外見がふつうの障害児の親との比較も試みた。

## < 結 果 >

FPへの参加状況は、表1に示したが、プログラムが定着してからは、着実な参加が得られ、グループによっては、6ヶ月FP、2年FPでも90%以上の出席者があるが、全体の出席状態では、6ヶ月目で79%、2年目で72%、5年目が25%となっているが、これは必ずしも同じ対象例ではないので今後さらに経過を見守る必要がある。まとまりのよかったグループの親たちは、FPを心待ちにし、なごやかなクラス会が展開し、欠席者からもアンケートや電話による連絡が得られ、ほぼ全員の状況がつかめている。

### — 親のグループ面接時の所見 —

終了後6ヶ月目のFPでは、中～軽度児の親

グループはいずれも、明るい活気ある雰囲気になり、話題の中心は、幼稚園や保育園での普通児との交流の苦心、体操、水泳、言語などの特別指導通いへの親おしおしの競いあいなど、スケジュール一杯に頑張る姿が共通にみられている。同時に、園生活で子どもと離れる時間がふえ、母親たちもはじめて余裕がもてるようになってきている。しかし、重度児の親グループでは、健常児集団に入ったものも、障害児の通園機関に行っているものも、遅々とした進歩にあせり、所属機関が十分に指導をしてくれないという不信感や、また障害児ばかりで健常児の刺激がないから伸びないといった疑問をいただく親が多くなっている。保育園とか他の指導機関にゆけばもっとよいのではないかという動揺も多いし、実際に他機関遍歴をくりかえしている例もみられた。通園時間も短かったり、親子一緒に指導を求められたり、親が余裕を持てる時間がなく、重苦しい雰囲気と不安が感じられるグループが多くなっている。しかし、定評ある機関に所属し、しっかりしたカリキュラムと熱心な指導を受けているものは比較的安定している。

2年目のFPでは、就学年齢時の親がふえること、地域機関での生活が定着してくること、弟妹の誕生などのため親が何らかの変化を示している。中～軽度児グループでは、普通学級への希望が強く、親とおし互いにはげましい、就学相談でも希望をつらぬいて普通学級に入学できるものが多い。活気とたくましさをも身につけ、一段と養育に自信をもつ親が多くなっている。重度児グループでは、まだ言葉の出ないことに新たな不安を示し、就学相談のふりわけ、きめつけに強い不満を示している親が多くなっている。就学は、子どもの状態像より常に1ランク上の学校を希望する傾向が強く、養護でなければよいと特殊学級を熱望する例や、普通児との何らかの交流を求める声が大きくなっている。保育園での受け入れ時間の短いことへの不満や、通園

だけではなく、特別な個別指導などを併用させ、一日の指導時間の延長を望む声もできている。行動異常合併の強い例では、親から離れての指導時間が少なく、疲労で不安定な状態におり、全体に暗い雰囲気が強くなっている。

5年目のFPでは、出席者も常連ができ、全く連絡のないものも増えてくる。全員が就学しているため学校についての話題が中心となる。普通学級在籍者は、たえず特殊入級をすすめられる不安や、健常児的となっていじめられるつらさを訴えているが、健常児との交流を期待し努力する姿勢は強い。学習に関しても母親の家庭指導がかなりの比重をしめている。特殊在籍者の中には、めざましい伸びのないことに対して特殊教育への不満（勉強時間が少ない）を訴えたり、担任への鋭い批判を口にする親が多くなっている。また依然として、普通学級への転入を期待しているものも残っている。しかし、熱心なカリキュラムで合宿指導などが頻繁に行われる特殊学級に所属しているものや、着実な伸びを示す特殊在籍児の親は安定しており、特殊学級に入級したからこそこまで伸びられたと満足している。養護在籍児の親の中には、あきらめとひらきなおりの落ちつきを示すものと、通学によりはじめて休む間のない介助の生活から解放され、みちがえる程の明るさと余裕をみせる親とがあり対照的である。また、5年の経過がありながら、全く子どもの状態像をつかもうとせず、建前論のみにすぎり、重度児でありながら普通学級在籍を続け、状況に合わせた対応や変化の全くない親が数人みられた。

以上のような特徴が、5年の経過の中で示された親の障害児養育への主な姿勢といえるが、少数例含まれている身体的所見が明瞭な障害児の親が運動機能の障害や難聴、特定の身体疾患にのみこだわり比較的安定していて態度の著しい変化も少ないのと対照的である。

### — アンケート調査を通しての所見 —

通所時初期では、表2、表3のように、育児書はあまり利用しない(30%)親が多く、

表2 一般育児書の利用(初診時)

対象者数 82名(%)

使わない	1冊のみ	2冊以上	不明	計
25 (30)	29 (35)	21	7	82

表3 困った時の相談相手(初診時)

対象者数 82名(重複回答あり)

夫	実家の母	姑	医師 専門家	知人	親せき
38	32	10	13	6	2

相談相手も身近な夫を頼るものが多く、年度ごとにその傾向が強まり、実家の母親や姑に育児の相談をするものは減っている。代わって、テレビ、新聞、雑誌を媒介とする育児情報に頼るものがふえている。通所時初期に30%~50%の親がNHKテレビを通して知った“言葉の治療”に関する本の影響を受けていることはテレビ情報に依存する最近の親たちの養育態度を示している。重度児の親は、6ヶ月、2年という経過の中で必ずドーマン療法の情報を経て、その治療を受けるべきかと一度は思い悩んでいる。このように、マスコミ情報を豊かに受けている親たちであるが、わが子の障害の原因についての認識は、表4のように、通所初期では親の育て方が原因と考えるものがかなり多いが、指導経過とともにむしろ“わからない”と考えるものが増えてきている。これは長い経過の中では原因は“わからない”ばかりか、“わかりたくない”し“わかっても仕方がない”ものという傾向が現われてきているといえる。この項目へのアンケート解答では、特に遺伝という項目を強く否定し、×をわざわざつけているものが多くみられる。将来への変化については、表5より、通所初期には“学齢時にはなおる”と考えるものがみられているが経過とともに少なくなっている。そして、部分的変化に期待するものが多くなっている。

表4 障害の原因についてどう思うか（重複回答あり）

	通所初期 23人(%)	通所後期 25人(%)	6ヶ月目 50人(%)	2年目 16人(%)	5年目 16人(%)
わからない	10 (43)	16 (64)	28 (56)	10 (62)	12 (75)
親の育て方	11 (48)	6 (24)	21 (42)	3 (18)	4 (25)
妊娠, 周産期	5 (22)	8 (32)	24 (48)	2 (13)	0
遺伝	2	1	3	0	0
その他	2	3	1	2	0

表5 将来どう変化すると思うか（重複回答あり）

	通所初期 23人(%)	通所後期 25人(%)	6ヶ月目 50人(%)	2年目 16人(%)	5年目 16人(%)
わからない	15 (65)	15 (60)	27 (54)	5 (31)	7 (44)
部分的変化はある	14 (61)	17 (68)	26 (52)	7 (44)	10 (62)
小学校	2	1	4		
中学校	5	2	4	1	4
大人					2
なおらない	0	2	6		
悪化する	1	0	1		
その他			1	2	1

### <考察とまとめ>

障害児の親の養育への姿勢の変化を、対象者の全体的経過という形で調べたが、今回は必ずしも同じ対象者の2年、5年フォローではないため、次年度は、個々の親の性格と経験、子どもの年齢、障害の状態、受け入れ機関の指導状況、就学の条件など多様な因子を分析した上での親の養育態度の変化の研究にとりくみたい。今年度は、大まかな経過による特徴を把握することを試みたが、障害児の年齢が小さく、障害の程度が軽いもの、受け入れ機関が熱心な例では、親は活気ある養育態度を示していることが明らかであった。しかし、重度児では、年長になるにつれ、健常児集団での適応に無理が生じ、介助がなければ、落ちこぼれの存在が目立ち、親を失望させ、不信の気持をひきおこさせている。また、子どもの発達の経過とともに、悩み、不安とたたかった親は、よく子どもの現状をつかみ、成熟し安定した親に成長しているが、きめつけ的パターン化した発想しかしない親は（前年度研究でのP型の親）2年、5年の経過の

中でも全くかわっていない。

地域の中での統合教育の試みも、中～軽度児では問題も少ないが、重度児では、かえって親の不安と養育上の混乱をもたらしている。この場合は、具体的な“how to”で示される養育法が求められ、熱心な指導プログラムと日常の中での“how to”の指導がこれらの親の養育への前むきの姿勢を支えることが明らかであった。いたずらにマスコミの魔術にのったhow to指導の情報で親を混乱させずに、着実な指導を行える体制づくりが必要とされている。

### 参考文献

1. Kanner, L., Parents' Feelings About Retarded Children. *Am. J. of Mental Deficiency* 75 (May) 1971 685-691
2. Strom, R., Rees, R., Slaughter, S., Child-Rearing Expectations of Families With Atypical Children. *Am. J. of Orthopsychiat.* 51 (2) April 1981 28-296



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### <目的>

児童精神科の臨床の間では、障害児の養育相談が占める比率がかなり高いが、きめ細かな養育指導を行うためには、障害児の症状を明らかにするだけではなく、親の養育態度を十分に理解していなければならない。すなわち、子どもの障害の重さや適応の状況を知るだけではなく、親の性格、不安、影響を受けている情報や就学への考え方などを考慮することが養育指導を行う際に大切なことである。

前年度の研究では、外見上明らかな身体所見の少ない精神遅滞児について、親の養育態度と子どもの状態像との関係を調べたが、今年度は、同じ対象児の親たちが、2年、5年という経過の中で、子どもの発達と社会条件の中でどのように変わってゆくかを調べ、必要とされる指導体制を考えた。